

宝塚市自立支援協議会 専門部会 「こども部会」
令和元年度 活動経過報告

- I. 開催日時 第1回 令和2年11月12日(木) 13:30～15:30 出席者19名
第2回 令和3年2月4日(木) 中止

II. 要旨

第1回こども部会 (R2. 11. 12)

1.各機関で行っている新型コロナ対策や現状

日中一時支援：自粛を呼びかけながらも入浴介助の中止以外は通常営業をしていた。様々なところが休みになり、自粛している中で保護者がしんどくなられ、気分転換するために利用して頂くこともあった。同法人内の短期入所事業所は完全に休みの対応をした。就労A型、B型通所事業所では人数制限を設けて対処した。現状は対策をしっかりと行い、普段通りのサービス提供を行っている。

障害者団体 A：役員会やレクリエーション等を中止。家族がコロナにかかった場合、当事者がどこへ行くのか、どうしたらいいのか何も決まっていないので不安との声が多く上がっている。

障害者団体 B：5月に、学齢期向けに休校中の様子やどのような感じで過ごしているのかのアンケートをとった。会の活動は徐々に進めているが、徐々に感染者も増えてきているので今後の活動については検討中。講演会等の活動は中止している。会員からは学校行事(運動会等)がないことで、練習などのイレギュラーなイベント・スケジュールが苦手な子どもにとっては、安心して落ち着いて過ごせているとの意見もある。家族で感染者が出た場合、「子どもたちはどういう風になるんだろう」と不安が強い。

児童入所施設：緊急事態宣言が出てから施設の児童は学校へ行けなくなったが、それを理解して頂くのに苦労した。コロナ自体の怖さを分かりやすく説明するのが難しかった。緊急事態宣言が解除されて以降も、特別支援学校や地域の各学校の感染予防の観点から、一斉登校ではなく、分散登校や時間で仕切ったりするような登校で、非常に現場が混乱した。現在はスムーズに登校できるようになった。施設サービスについては、外出や面会、外泊は一斉に自粛となった、今現在は徐々に緩和しており、面会は予約制。外出、外泊は12月から再開、2泊3日で自宅のみという自粛緩和を考えている。社会支援(公共交通機関を利用しての外出や散髪に行く等の社会訓練)も一旦全て休止していたが、制限しすぎると成長が滞ってしまうという事で、徐々に緩和し、12月から公共交通機関での社会訓練も予定。

教育委員会：5/31まで休校期間で、9/12まで分散登校という形になっていた。運動会等の行事関係も全て簡素化、修学旅行・自然学校の宿泊行事も日帰りということになった。特別支援では、

病弱学級の児童が登校できないことがあったため、その学校に関しては ZOOM を使って学習保障をされている状況もあった。スクールサポーターを増やして対応している状況。

幼稚園：小学校と同様、6/15 から通常保育が始まった。ただし、3 歳児クラスの保育は、お弁当が始まらず 9 月からお弁当を開始し順々に通常に戻して行っている。マスクをつけて登園するがなかなかソーシャルディスタンスを伝えるのは難しく、各現場では手洗いをする時に待つ線を引いたり、手洗い場で近づかないように 1 つ飛ばしで使ったり、お弁当を食べる時に仕切りを作る等、各幼稚園ごとに色んな対策をとっている。現在も保育後は、消毒する対応に追われていると現場の声もある。普段であれば未就園児（幼稚園に入る前の乳幼児）が幼稚園に来て遊んだり、触れ合うことがあるが今年は全くできていない。2 学期に入ってから少しずつ予約をして頂きながらオープンスクールを開催している幼稚園もあるようだ。参観も人数を制限しながら小学校と同様、行事が簡素化されている。研修に関しても必要性を精査し、人数を制限したり、通常 1 回で行う研修を 2 回に分け広めの会場を設定している。

教育相談：感染が拡大してくるにつれ、来談することへの感染不安を感じるクライアントも増加していた。対面での相談はクライアントと相談し、気持ちを聞きながら合意の元、回数を徐々に減らし、電話相談やお手紙での相談に切り替えた。そして、国の当時指針で言われていた接触を 8 割減らすという部分で、当時行っていたケースの 2 3 %位に数を絞った形をとらせてもらった。今後の対策としてリモートによる教育相談を整備できないかと今回、国の新型コロナウイルスの地方臨時交付金を申請させて頂き、無線 LAN の工事を行った。

適応教室：子供に対応する指導員が 3 名に対し、児童は多い時は 2 0 名ほど通ってくる。例年であれば大学生のボランティアがとても大きな役割を果たしていた。個別対応や、良いモデルになってもらえるお兄さん・お姉さんとの関りにより成長が見られたが、大学生が課外活動も許されないという状況であった。対応するスタッフが不足しており、かなり苦勞して運営してきた。近況としては、ちょっとずつ大学生ボランティアが戻りつつある。

支援学校：基礎疾患を有している児童、生徒が多かったり、新型コロナウイルスに感染した時の重篤化のリスクを考えて、市内のマニュアルをベースに本校独自のマニュアルを作成し対応を行っている。子どもたちは、4 月に始業式、入学式を行えなかったことで子どもやご家庭の不安が大きかった。その中で学校と家庭がどのように繋がるかを考え、家庭連絡を密にしたり、生徒に課題を配布したり、また、教員自作の動画を YouTube 配信などのサポートで休校中は繋がりを持つようにした。休校が明けて子どもたちの様子は、身体の拘縮が進んでいたり、心理面からなかなか給食が食べることができなかつたり、新しい環境の中で筋緊張が強くなる子等が見られたが、今は少しずつ慣れて、学校生活を楽しんでいる状況になっている。感染対策としては、マスク着用できる子ども達が少ないため、教材教具の消毒の徹底をしている。教職員の手洗いアルコール消毒の実施、3 密を防ぐため、委託バスを 1 台増便した。全校一斉で集まらずに、教室を分散したり、校内放送や校内の動画配信で行っている。各職種からの意見を集約して、子ども達が安心安全に登校できるように整備して行っている。現状では冬の対策が課題。暖房による乾燥や換気

が難しくなること、インフルの流行時期の為、対策を検討している。

小学校：6月までの休校と分散登校。対人関係がしんどい子にとっては休校で良かったという意見があるし、分散登校が登校の練習になりちょうど良かったという子もいた。オンラインは整備が整わなかったため、相互での生徒とのやりとりが非常に少なかった。一部の中学校では、YouTubeの動画で子ども達に配信している学校もあり、学校差があった。家庭に任せてしまう事が多かった。通級指導では一部オンラインでの指導ができたケースもある。通級指導の担当者会議をオンラインで実施している。校内でどうしたらオンライン授業が取り組めるのか、第3波になってくると何かまた次の形で利用できたらと学校では検討している。子ども達は「短い夏休み」や「いつもリズムが違う学校」のため、見えない不調、調子が悪くなってきているという方が多くいる。教員もオーバーワークになっているところが見えている。10月は中学校でいうと出来なかった体育大会、できなかった修学旅行、トライアルウィークの大体の行事がかなり毎週のように入ってきており、子どもたちはしんどい状況だったかと思う。行事が好きな子は残念だと思っていたことが返ってきて良かったということはあるが、行事がなくなったはずなのに復活したことに対してしんどいと思う子も居る。中学生でもソーシャルディスタンスが難しかったり、感覚過敏がある子がマスクをするということが難しかったりしながら、フェイスガードや色んなものを使いながら工夫している。難聴学級がある学校では、できるだけ先生は透明のマウスシールドを使いながら授業をする工夫もしている。

小学校：一番影響があったのは1年生。入学して学校のルールを緊張の中で覚えていくところが、休校、分散登校で、落ち着かなかった。宿題でもひらがなを書かないといけないのも家任せになっていた。学校でももう一度取り組むが、鉛筆の持ち方等細かいところを全員で勉強できなかったため、子どもによって差が出てきている。これからフォローしていかないといけない。6年生は最高学年として、音楽会もない、運動会もないということで、学校で活躍する場が少なくなってきているため、自分で動いていくことが育ちにくい。修学旅行に行ったり、色んなことをする中でも自分たちで動くことを覚えるが、今は勉強ばかりになってしまっている。

健康福祉事務所：2月、3月位からは通常業務は全部ストップしている。コロナの中で見送りになっている研修会等もあるが、会議を開催する際に、研修の中で陽性者が出て濃厚接触にならないように手指消毒はもちろん、会議の席の配置や本来向き合って会議を行うところの会場を大きくし、席をずらして対面にならないように配慮しながら運営した。小児特性慢性疾患をお持ちの長期療養児の方で、なおかつ呼吸器等使っている方については災害対応マニュアルを家族と一緒に作らせて頂いているが、コロナが流行っている時は、訪問・来所ともに難しく訪問の回数も減り、電話での連絡だけになっていることもあり、マニュアルの作成もゆっくりである。窓口はアクリル板をして対応している。

児童発達支援：通園部門に関しては、4、5月は児童発達支援については継続して続けるように、1日おきで半日での通園や保護者に自粛をお願いし、人数を少なくしてスタートした。6月からは

徐々に通常に戻ってきているが、就学前で発達に課題があるお子様でマスクが出来ないお子様も居たため、消毒や換気などに気をつけ療育している。通園バスでは、隣同士に座らないように離れて座るように配慮しているが、療育中はどうしても接触していることが多い。大人側で配慮出来ることは出来る限りで対応している。相談支援では、来所での相談が難しかったため、電話での相談、郵送で対応した。4,5月は実施できなかった相談事業も6月は人数をセーブしたり、広い場所を借りながら実施している。親子教室事業は本来、2部制にし、人数を減らして対応している。講座や行事は今年度は全て中止。総合相談は、健康センターの相談が一時止まっていたため、その間、家で過ごされて不安な方が、直接小児科で受診され、療育の申し込みをされるケースが結構あった。

保育所：緊急事態宣言を受けて保護者の職種を制限した特別保育として普段の2割程度の出席率となった。保育所に来られている各家庭の事情も様々であるため、各園でそれぞれ状況の聴き取りをして保育の幅を持たせて対応した。6月からは通常の保育になったが、各園で検温の徹底や室内、使ったおもちゃ等の消毒を朝夕、かなり丁寧に行っている。ボードゲームや遊びの中で、保育所の子供たちに密を避けると言うのは難しいが、その中でもつい立てを利用する、食事中はグループを少なくして食事をする、幼児になったら喋らないで静かに食べようと言う事ができるようになってくるため、静かに食べることができるようになったと聞いている。手洗い等もコロナの中でしっかり身に付いて、きっちり手洗いできるようになった。集まる行事はなかなか出来ていないが、5歳児のみ運動会という形で実施したところも多く、保護者も制限して来ていただいた。乳児や3.4歳クラスに関しては運動参観という形で分散して観てもらった。夏の遊びもコロナ感染予防の為に、プール遊びをしなかった園が多く、水遊びのみで過ごしたため、猛暑の中、大変だった。お散歩や電車を使つての遠足も控えており、近くの場所への散歩で対応した。保護者が色々な仕事をされている為、身近な方がPCR検査を受けるということが増えてきた。保護者がPCR検査を受ける際は、お子様もその時点でお休みして下さっている事もあり、今のところ園での感染はない状況。保育所見学ができない状況である為、電話で保育所の様子を説明している。歌を歌う、運動遊びなど様々な体験が必要な中で感染予防との兼ね合いで苦労がある。運動不足で、骨折する子どもたちが増えているという報告も上がっている。

健康センター：新生児家庭訪問は個別対応の為、必要な人、希望者のみ対応した。6月から乳児健診を再開しているが3か月休止中の方をどんどんやっつけていかないといけない状況であった。4ヶ月、10ヶ月健診の赤ちゃんの健診に関しては、医療機関での個別健診を医師会とも相談して初めて実施ができた。1歳半と3歳半健診は集団で再開しており、以前は1回の健診に80人位の対象者であったが、密になる為、現在は最大で40名の予約制で健診をしている。できるだけ保護者は1名で兄弟はどなたかに預けてもらい、家を出る前に検温して頂いて、健康センターでも検温、消毒して頂く形で来てもらっている。滞在時間をなるべく短くするために健診の内容もやむなく簡素化し、必要な人には必要な検査を実施している。会場の設営もスペースを空けて、窓も開けて対応している。発達の遅れがある方をしっかりキャッチして早期に相談や療育に繋がるのが目的であるが、簡素化したため、しっかりキャッチできていないのではないかと心配もある。母親

からの相談を受けたいという希望は、以前と比べて増えている状況。長い時間家で一緒にいる事で気になる方も出てきたこともあるかもしれない。3歳児健診になると、集団での経験から発達の遅れに気が付くことが多いが、休校等で集団に入るタイミングが遅れ、経験ができておらず、相談に繋がりにくいところはあるのではないかと。相談事業は、緊急事態宣言が出て、5月末までは中止をしていたが、その後再開するにあたって、母親学級・両親学級など対面相談をタブレット2台用意し、一部はオンラインで実施したり、来談しなくても相談できたり、教室に出て頂いたり、少しずつ模索しているところである。離乳食学級もオンラインで出来れば、赤ちゃんを連れて出てきてもらうご負担も減るか検討している。

子育て相談と児童虐待の通報窓口：上半期の傾向は、世間的には児童虐待やDVの数は新聞報道では増えている報道があったが、実態としては緊急事態宣言中の通報は全体的に減少していた。要因としては保育所・幼稚園・学校からの連絡が大幅に少なくなったため、入ってくるものは警察や児童相談所、市民が直接市役所にかけるというものが多かった。7月以降学校や健診が再開したことで虐待通告も大幅に増加している。学校や幼稚園がなく、一緒に居ることがしんどくなったストレスがお互いにたまって親子間トラブルにつながったものも多く見られた。子育て相談は通常通りしていた。他の所で相談できない方からの相談が多くあった。「一緒に居るのがしんどい」「過ごせる場所はないか」等、コロナの影響による育児のしんどさが多く見られた。最近になって少し落ち着いたが、状況が大きく改善していないこともある。家で一緒に居る事での親子喧嘩、在宅勤務での夫婦喧嘩による虐待通告も増加している状況である。

相談支援：緊急事態宣言の時は対面の面談は難しいと言う事で電話相談に切替を行った。徐々に感染者が少なくなっていく中で、対面希望者の方には時間を短くして15～30分で対応させて頂く場合や、対面が怖いという方にはZOOMでの面談を勧めさせていただき、現在でも積極的にZOOMの面談を取り入れている。対面での面談の時も必ず、透明パネルを設置して感染対策をしっかり行っている。研修も密になる場合は、可能な限りZOOM参加に切り替えている。

障害者団体C：難聴の子供たちにとってマスクをしていると何を言っているのかわからないため、会で透明のマスクを購入して学校に配布した。

自立支援協議会：コロナの影響で上半期、活動自体止まっている。相談支援事業所が集まる事務局会議・障害者特定相談支援事業所連絡会も一旦中止になったが、7月以降初めてリモートという形で来庁を併用し再開し、密を防ぎながら現在もそれぞれ月1回継続している。

2.その他

- ・地域生活拠点について

障害福祉課：地域生活支援拠点についての説明

部会長：地域生活支援拠点に関してはとても大きな変化だと思う。

- ・トライアルプロジェクトについて

委員：教育・福祉・家庭が連携するというプロジェクトが進んでいる。今後どのようなスタイルで

で繋がっていくことが理想なのか、モデルのようなものを今作ろうとしていると思うが、宝塚の中で理想的なモデルって何かというのをこの会の中で共有したり、こんな例があったと発信できたらいいと思う。良いものがあれば知りたいと思うし、共有したい。

部会長：トライアルプロジェクトについては私もしっかり理解しているわけではないが、割と読んだ感じでは宝塚がやっているなという感じではあった。そんな話も子ども部会でできればいいかなと思う。来年度以降、大きな課題の1つとして考えたらよいと思う。

副部会長：学校帰りに放課後等デイサービス（福祉）を利用し自宅に帰るパターンが多くいらっしゃるため、連携が欲しい。また、幼稚園から小学校、小学校から中学校等、学校が変わり、進学する時の節目のタイミングでケース会議的なものがあれば嬉しいなという話は聞く。

部会長：このトライアルプロジェクトについてもまた子ども部会でもしっかりと話し合っていけたらと思う。

考察

次年度に向けて、コロナ等の緊急事態が今後も起こりうることを想定し、今回の経験から、緊急時の支援について継続して検討していくこと、また、トライアングルプロジェクトについても宝塚の形を検討していきたい。